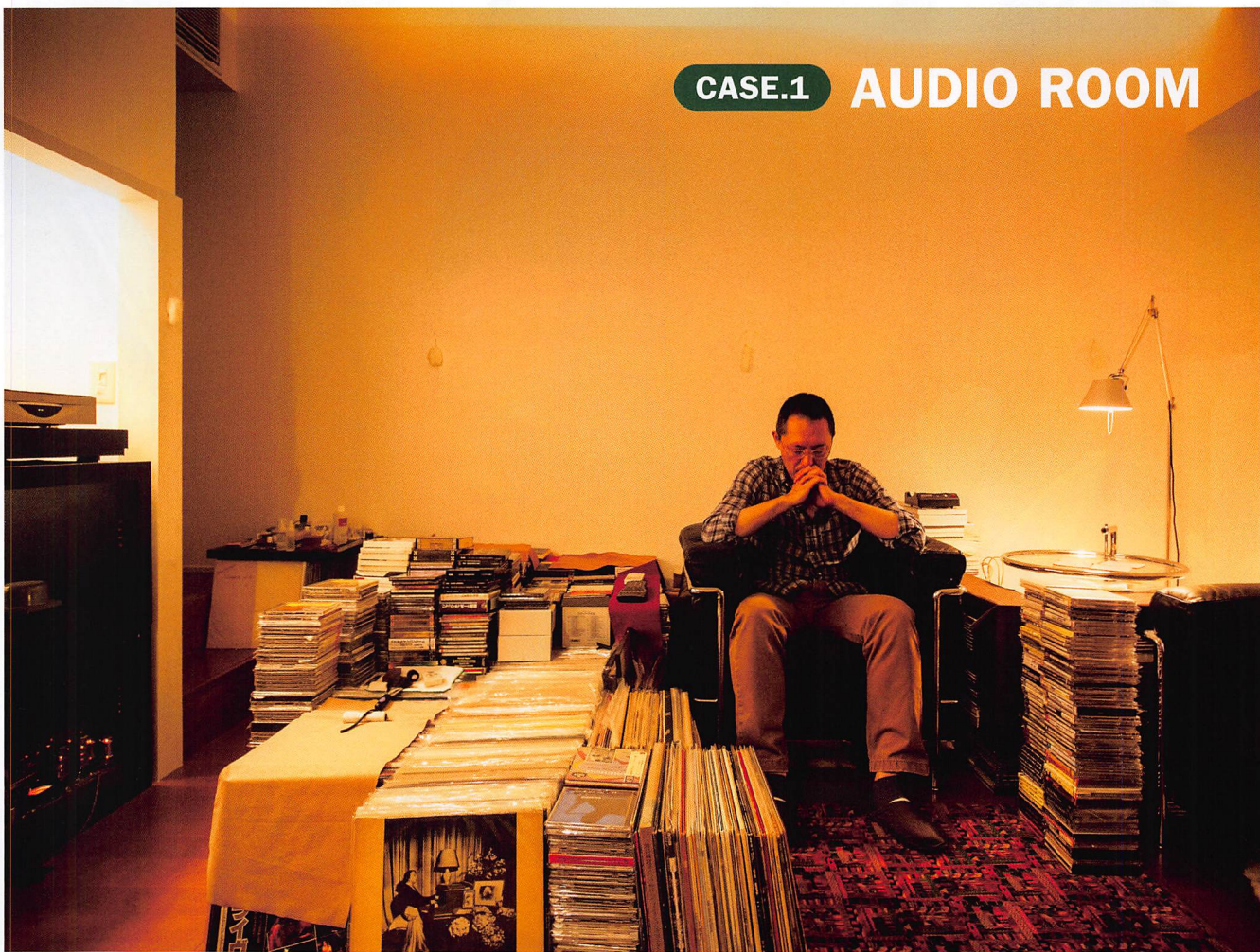


The Sound&Screen

6 男はどうしてここまで音響機器にこだわるのか？

オーディオの趣味には、手間と空間とそして惜しみなく注ぎ込める財力も必要だ。そのため往々にして家人には理解しがたい趣味となる。同じ趣味の者が集まれば楽しく話はずむかといえども限りなく、こだわりが強過ぎるためだ。そんなやっかいな趣味に正解もない。だからこそ奥深く、生涯つきあえる楽しみになるのだ。

CASE.1 AUDIO ROOM



素晴らしい音源の録音状態を再現する

素晴らしい音源には、演奏家が作曲家に乗り移ったかのようなスピリチュアルな瞬間があるという。そんな神がかった音を再現するために作り込まれたオーディオルームがここだ。閑静な住宅地にある地下の防音室に置かれたスピーカーは、レコーディング時にスタジオで使うプロ用モニタースピーカーで、50年代のヴィンテージのタンノイGRFだ。安西利彦氏が英国駐在員時代に、ロンドンのロイヤルオペラ・ハウスで幕間に飲みに行くようになった仲間が招いてくれた瀟洒な邸宅にそのスピーカーがあった。聴くたびに「音が気に入った」「素晴らしい」と熱く語るうちに、帰国直前にタイミングよく譲ってくれることになったのだそうだ。日本へは二重木箱にして低温コンテナで運んだ。

家の設計は、音楽家の住宅の設計を得意とする友人にお願いした。オーディオルームは芯々で3メートル離して設置するタンノイのスピーカーを置くために、横4×奥行き4.8×高さ2.9メートルに設定。壁は石を砕いた漆喰で固くするなど、スピーカーの特性が出るように設計したこともあり、ヴィンテージのスピーカーではあるけれど現在でもフラットな特性が測定できている。

スピーカーケーブルは50年前のオリジナルのもので、フェルトを敷いてフロアに接触しないように配置してある。室内を一定の湿度に保つために乾燥機が置かれているが、その電源コードもキューブ状のブロックに乗せ、スピーカーのケーブルとは触れないように立体的に交差させている。ノイズ元となるものは極力排除したいため家にPCは置かない。音楽を聞く時は他の部屋の電源を切るが、冷蔵庫はさすがに電源を落すことができないのでノイズフィルターを使ってノイズを軽減させている。防音室の定員は最大3人。うち1人は階段横で操作をする安西氏なので、ゲストは2人まで。ゲストはルコルビュエのLC2の上質なレザーシートに体を沈めることができる。音源はスピーカーの特性を十分に引き出すことのできるアナログレコードが中心だが、レコードが生産されなくなった時代以降の音楽については、CDを聴くことも多いそうだ。「演奏者と製作者の気持ちがかもっている、初盤のCDを選んでいきます」週末は朝から夜遅くまでリスニングルームにこもってクラシックを一日中聴くことが多いが、友人を招いた際には、ワインを傾けながらジャズやロックを聴くこともあるそうだ。

こだわりの空間でじつと音楽に耳を傾けていると、ふと壁が消え、演奏家のタッチや息遣いと対峙しているような感覚になる。密閉されているはずの防音室が、音楽と共に時間も場所も飛び越えて、音が生まれた場所に変えてしまう。安西氏が作るオーディオルームには、そんな力があるのだ。

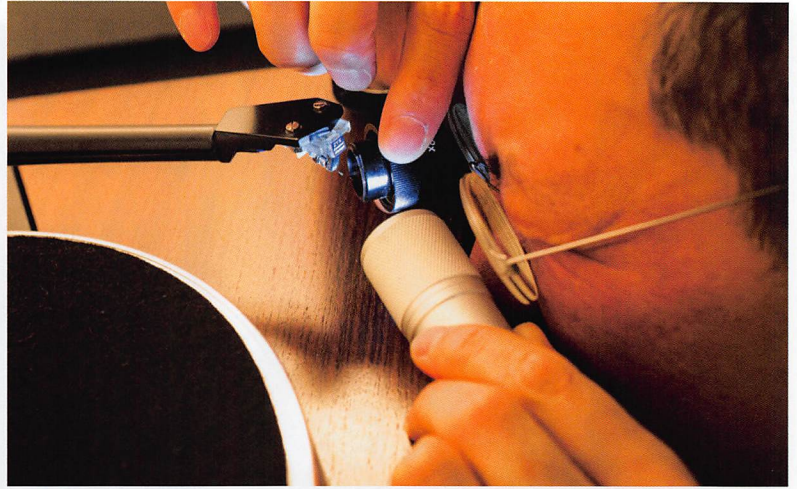


↑階段下の倉庫にはLPレコードが収納されている。「奇跡の演奏を録音したレコードにめぐり遭うために、むさぼり聴いてきたレコードたちです」その手前には今は出番がほとんどなくなったナグラのオープンリールデッキIV-SJ

The Perfect Weekender.



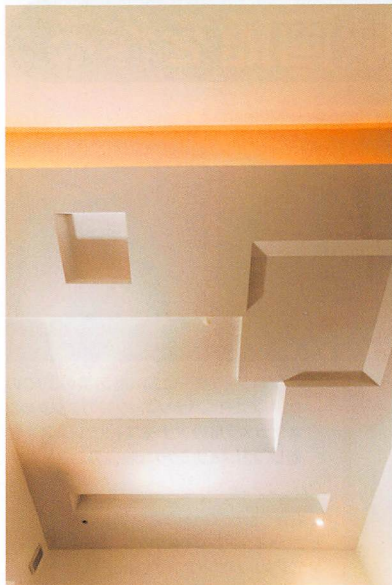
← マランツ#7のモノラルパワーアンプを2台使用してステレオに。ひととき、輝くレベルメーターがセンターに配置され、周りに6本の真空管がほのかに光る。切れた真空管の交換は経験上取って1本にしている



↑ アナログプレーヤーで使うZYXのカートリッジをチェックする安西氏。フラッシュライトと30倍のルーペで汚れを確認する



↑ LPレコードが汚れてくると音に現れる。シンク下に逆浸透膜浄水器を備え、RO水を流しながらLP盤の幅に合わせた特製の歯ブラシで縦横にブラッシングする



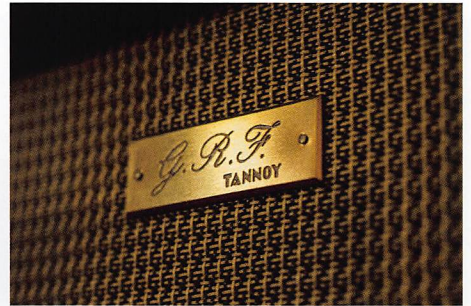
↑ 天井までの高さは2m80cmあり、表面には特徴的な凹凸が施されている。音楽家の部屋を手がける友人による設計



↑ プリアンプは6本の真空管を使う往年の銘機マランツ#7。1959年に発表されたモデルで、アナログプレーヤーのロクサンザクシース10、CDプレーヤーのリンCD12などが接続されている

← オーディオラックと壁面にある約20センチの空間。それぞれのケーブルが接触しないよう、糸で吊られて空中で交差している

↓ → スピーカーはタンノイGRFモニターシルバーを2台。15インチの同軸型ユニットを擁するキャビネットは高さ1.1×幅1メートル。生産された50年代にはモノラル時代のため、基本的には1台で完結する。ロンドンの前オーナーがさらに1台を探し出し、ステレオとして使っていたものを譲り受けた



●Profile

安西利彦 / 1960年生まれ、神奈川県出身。ピアニストを生業にしていたが、25歳で広告代理店に転職。駐在員時代は世界各国を巡る。英国には4年滞在し、現在は東京在住

